



マメアサガオ (ヒメアサガオ)



学校法人中部大学 監事 太田明徳



ヒルガオ科サツマイモ属 *Ipomoea lacunosa*。北米原産の帰化植物。学内職員住宅近くの道脇に見た。1955年に東京で生育が確認され、現在は関東以西の道端などにふつうに見られる（ウィキペディア）と言う。蔓草で電柱などにも絡みつく。夏から秋にかけて咲く白い花はアサガオのように漏斗状だが、花冠の上から見ると径1.5cm程度で、五角形に見える。果実もアサガオに似ていて、乾いた

殻中の種子もやはり黒い。1年生草本なのに毎年同じ場所に見られるのは、種子の生命力が強いのだろう。葉はアサガオに似るが、小ぶりである。花言葉の「見つけたら幸せ、堅い絆」は逞しい蔓植物ゆえだろう。

分類学上、アサガオがサツマイモと同属とは驚きである。サツマイモの花を見たことはないが、図鑑ではアサガオのような漏斗状である。アサガオであるが、奈良時代に薬用植物として中国から到来した。種子はファルビチンと呼ばれる複雑な構造の樹脂配糖体が主成分の生薬「牽牛子（けにごし）」であり、粉末にして下剤や利尿剤として利用されてきたと参照した本にあった。

江戸時代後期にアサガオは観賞用として愛好され、多くの品種が生みだされたと言う。現代でも朝顔市は各地にある。小学校の教材としても普及している。ツルを伸ばしてどんどん成長し、早朝に咲く色鮮やかな

大きな花は、早起きの子らに感動と喜びを与える。私の子供たちも鉢植えを持ち帰り、その観察が夏休みの宿題であった。しかし、私は日々の暮らしにかまけて貴重な機会を逃していたようである。ツルはどうやって支柱に巻きつくのか、なぜアサガオの花の色は青や紫が多いのか、どうして朝早く咲いて夕方には萎んでしまうのか、おしべとめしべはどのようにできているのか、種子はなぜ黒いのか、なぜ種子は生薬の成分を含むのかなどなど。今思えば興趣の尽きない教材なのだが。

駄句二つ。

叢草に小さき朝顔点々と
朝顔の悔いなど知らぬ白き色

参考)

- ・「原色日本帰化植物図鑑」、長田武正、p 157、保育社1976
- ・「日本の野生植物」、第5巻、p 30、平凡社2017
- ・ウィキペディア、「マメアサガオ」
- ・「花と樹の大事典」、木村陽二郎編、柏書房